

IV-54 景観構成要素としての道路建築物

— その1、景観の操作論的把握 —

東京大学農学部林学科

正〇 篠原 修

東京大学工学部土木工学科

学 究 田 陽一

東京工業大学工学部社会工学科

学 小 野 親一

はじめに

景観研究に最も古い歴史を持つのは地理学の分野である。近村^{※1}によれば、そこで課題とされたのは、景観形態学、景観生態学と景観生理学の追求であり、景観を生物体に類比してその形態、機能とそれらの歴史としての発達が景観の三側面であるとした。現象として地表面に出現している景観の把握を通じてそれに表現されている土地利用内容の解明を目的としたものと言うことができる。同様の研究指向を持つ分野として植物生態学的景観研究があり、景観把握を通じて土地の有するポテンシャルとしての多様性を捉えようとする(景域概念)。いずれも、土地利用計画等の開発・保全計画の基礎資料となるものであり、この種の調査の重要性は既に一般に定着したと言ってもよいであろう。

これらの景観研究に対して、景観を人間と物的対象との関係において、視覚環境として捉えようとする立場をとるのは、C. SITTE, MAERTENS 以来の操作的景観研究の流れであろう。この流れに含まれるのは都市計画、建築、森林美学、造園、土木等の諸分野である。筆者の立場がこの流れにあるものであることは言うまでもない。

1. 諸概念、タイプ、指標・要因の位置づけ

では、様々の研究分野において現在までに提出されている概念、景観タイプ、解析指標等ほどのように整

理し得るであろうか。全てを包括して考察することはとうてい私のよくなし得る事ではない。ここでは、景観を目的的に人間の為に改変・保全する、即ち操作論的に扱うという観点から問題の整理を試みることにする。視覚環境としての景観は人間と物的対象との空間的、時間的関係性において現象する。従って、視点と対象の関係性を軸に、従来の諸概念を整理すると次の様に考えることができる。

(1) 解析指標あるいは操作因子の抽出

視点と対象との直接的関係性を表現するものであり、視角、距離、仰・俯角、視線入射角、可視・不可視、等がこれにあたる。これらは対象の諸属性(サイズ、形、肌理、色彩、材料)との関連において対象の現象の仕方を決定している。

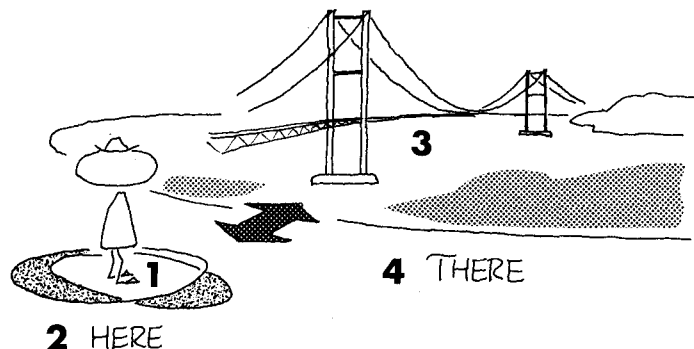
(2) 景観タイプの抽出

景観要素のセットによって何らかの意味でのプロトタイプを抽出しようとするものである。古くから良く言われる借景、通景、展望等の概念がこれにあたる。視点を要素として含むか否かによって、次の2つに分類できる。

① 視点と対象のセットによる景観タイプ

② 対象要素のみのセットによる景観タイプ

前者には、B. LITTON, JR.^{※2}による ENCLOSED, FOCAL 等の捉え方が代表的にあり、普通眺望のタイプという



景観の操作論的把握モデル

景観構成要素

1. 視点 V.
2. 視点場 LSH
3. 主対象 O.
4. 対象場 LST

要素の関係性

1. V — LSH
2. V — O.
3. V — LST
4. LSH — O.
5. LSH — LST
6. O. — LST.

時はこれにあたる。一オ、後者には上原敬三による森林、山岳、海岸という地理学的分類、植口忠彦による日本地形の空間タイプの抽出が代表的である。

(3) 対象景観の基本的要素(構造体)の抽出

以上の分析に対し、対象空間の景観構造自身を把握しようとする方向を持つ。最も抽象度の高い概念を提出したものに、N. SCHULZ^{*5}によるCENTER-PLACE, DIRECTION-PATH, AREA-DOMAINがあり、植口は前述のタイプから空間構成要素(境界、焦点等)を抽出した。又、K. LYNCH^{*6}による都市のPATH, EDGE 他都市の5つのエレメントもここに位置づけることができる。

2. 景観の操作論的把握モデルについて

ここで筆者が作業仮説として提出するモデルの目的は、次の3点に要約できる。

(1) 様々な形で提出されている指標・要因タイプ等を操作論的観念から位置づけ、それら諸概念の内容を明確化すること。この結果が前述の位置づけである。

(2) 景観構成要素を視覚系、対象系に大別して捉え、景観操作の本質がそれら要素自身の改変と要素間の関係性の変更にあることを示す。ここで操作可能な要素は一般的には視覚、視覚場、主対象である。

この観念に立てば、古来から定着している景観設計技法の操作的特性を明かにすることができよう。

(3) 景観を設計、計画する際に最大の課題となるのは、どのような景観体験をどのような要因・因子の操作によって達成させるかという事であろう。勿論、天候や個人の過去体験等操作の手に余る要因も多く、又主体の活動状況によって景観の価値判断にも大きな相違が生ずると予測される。このモデルにおいてはシカール・プランナーの立場から、景観の空間的操作がいかなる景観体験をもたらすのかという点に問題を絞り、評価とそれに寄与している物的要因を関連づけようとする(景観体験についての考察は稿を改めて述べたい)。以上、一言で述べるならば景観現象における操作性の獲得を目的とするものである。

3. 景観構成要素としての道路構築物

景観操作の実例として、筆者は既に'71~'75の発表において山岳、港湾、橋梁、高架橋等の対象との関係性、土木構築物の影響の問題を取扱ってきた。これらは全て、視覚と主対象(土

木構築物)、視覚と対象場、視覚場と主対象等の関係性として景観現象を分析したものと位置づけることができる。

今回の研究においては、道路において最もポピュラーな構築物である切土、盛土、高架橋を分析の対象として取りあげ、対象景観場におけるこれら要素の存在がどのように評価され、それらの評価を規定している物的要因が何であるのかを考察しようを試みたものである。その結果については、表題の共同研究者の発表に譲ることとし、ここではいわゆる外部景観としての道路の内部との相違、研究の基本的考え方を述べたい。

(1) 内部景観と外部景観の相違(表)

最大の相違点は、景観体験への主体の態度(利用の目的性、多様性)、景観の主対象性(走行景観ではそれは常に道路であり、他方では、主対象は一般に別の要素であって道路構築物は単に景観の一構成要素にすぎない)にある。従って、その操作目的は異なり、様相を示し、景観構成要素としての道路構築物は景観場との調和性の獲得、公共的視点への直接的影響力(圧迫感等)の軽減が求められることになる(ローラスト、V-1の関係性の問題)。

(2) 本研究における基本的考え方

既述の如く、景観の操作する観念に立つた道路景観の把握を行、ている事が第一である。次に、景観の現象解析において不可欠な人間の視知覚特性に基礎を置き、特にゲシュタルト学派によって示された「図と地」の概念を認知的側面において応用している。最後に、解析の客観性を保証し、操作化への物理量的還元を可能にする為の手法として、計量心理学的方法を採用している。具体的には、S.D.法とその数値処理に加えて数理化理論により、くいるものである。

注 *1 辻村太郎「地理学序説」'54 *2 R.B. LITTON, JR. "AESTHETIC DIMENSIONS OF THE LANDSCAPE" '72
*3 上原敬三「日本風景賞讃」'43 *4 植口忠彦「景観の構造」'75
*5 N. SCHULZ "EXISTENCE, SPACE & ARCHITECTURE" '71
*6 K. LYNCH "THE IMAGE OF THE CITY" '60

内部 景 観	道路の果している機能とその特徴	道路を利用する(走行と休憩) 単一的な利用形態(目的利用)
	景観の特徴と操作目的	走行の快適性(情緒性)の増大と安全性(認知性)への寄与
外* 部 景 観	道路の果している機能とその特徴	道路を景観要素として眺める。 日常空間、観光レクリエーション空間、通過空間等多様な利用形態(非目的利用)
	景観の特徴と操作目的	地域景観の保護、それとの調和、あるいは創造・整備 地域景観の一つの構成要素である。